

## 1 3 牛の歯肉の腫瘍について

滋賀県食肉衛生検査所 ○栗原磨美、山本香織

### 1. はじめに

牛の口腔内腫瘍は、悪性もしくは良性の腫瘍や炎症性のものが考えられる。今回と畜場において牛の歯肉の腫瘍を認め病理学的検索を実施したので報告する。

### 2. 材料と方法

症例は一般畜として搬入された牛、黒毛和種、牝、27カ月齢。右下顎の腫瘍部を検体として採材した。材料は10%中性緩衝ホルマリン溶液で固定後、定法に従ってパラフィン切片を作成しH&E染色およびアザン染色、グラム染色を実施した。

### 3. 結果

【生体検査】右下顎の腫れ

【肉眼所見】右下顎の歯肉部に6 cm × 5 cm × 2 cm程度の腫瘍が認められた(図1)。腫瘍は歯肉から隆起して形成されており、刀で容易に切除することができた(図2)。腫瘍表面は不整で、暗赤色を呈していた。腫瘍断面は、表面に硫黄顆粒様の黄白色結節が散在しており、中心部は白色であった(図3)。頭部検査では、舌の異常やリンパ節の腫大は認められなかった。その他の臓器および枝肉の検査では著変は認められなかった。



図1：腫瘍付着部



図2：腫瘍表面



図3：腫瘍断面

【組織所見】 腫瘍表面には、好酸性のアステロイド小体 (Splendore-Hoeppli) の形成を伴う菌塊を中心として多数の好中球が集簇し(図4、5)、さらに周囲を取り囲むようにリンパ球、マクロファージ等の炎症性細胞の浸潤と線維芽細胞の増生が認められた(図6)。毛細血管の増生が活発に認められる部位も存在した(図7)。腫瘍中心部では、アザン染色で青色に染まる膠原線維の増生が顕著であった(図8)。グラム染色では、菌塊は陽性を示し(図9)、グラム陽性桿菌であった。

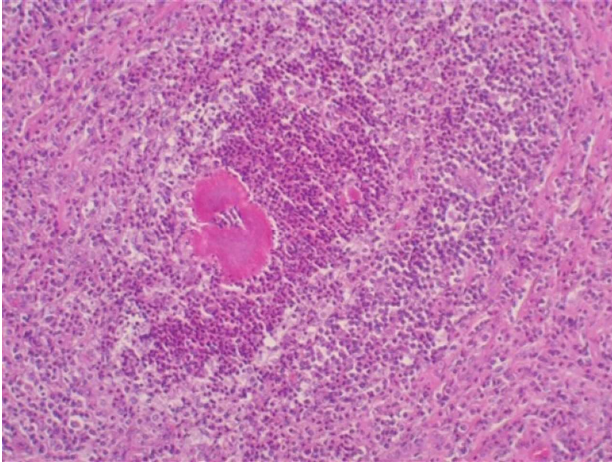


図4：菌塊と好中球の集簇(H&E染色40倍)

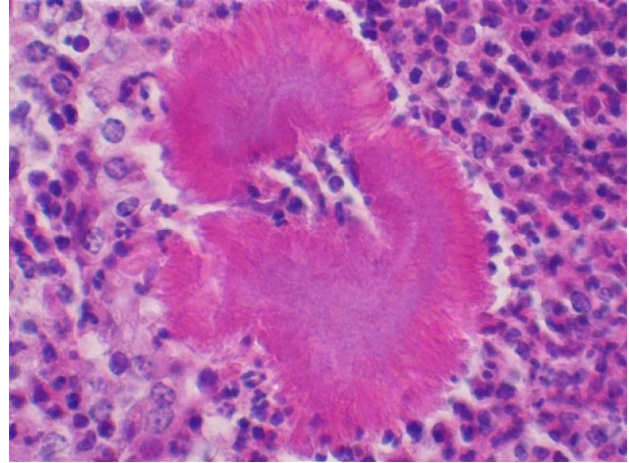


図5：アステロイド小体を伴う菌塊(H&E染色400倍)

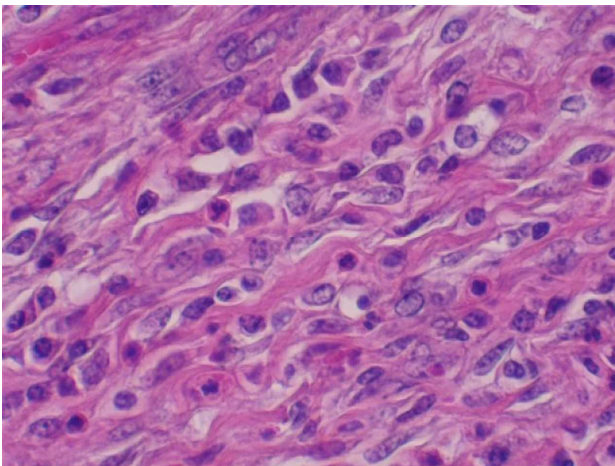


図6：線維芽細胞の増殖、炎症性細胞の浸潤(H&E染色400倍)

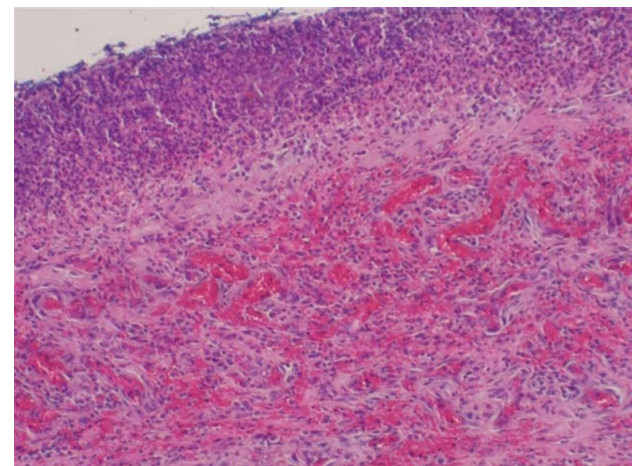


図7：毛細血管の増生、炎症性細胞の浸潤(H&E染色40倍)

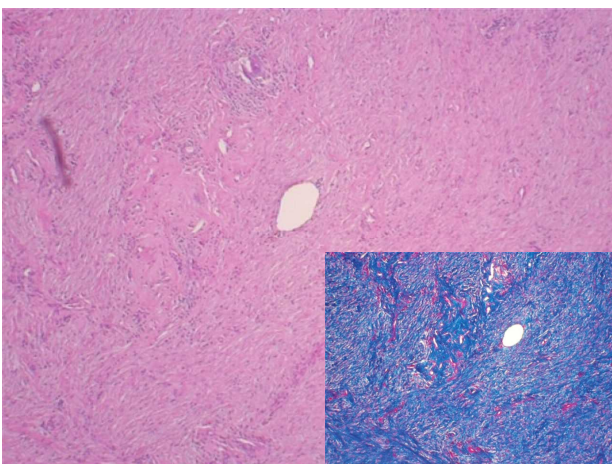


図8：膠原線維増生(H&E染色40倍、アザン染色40倍)

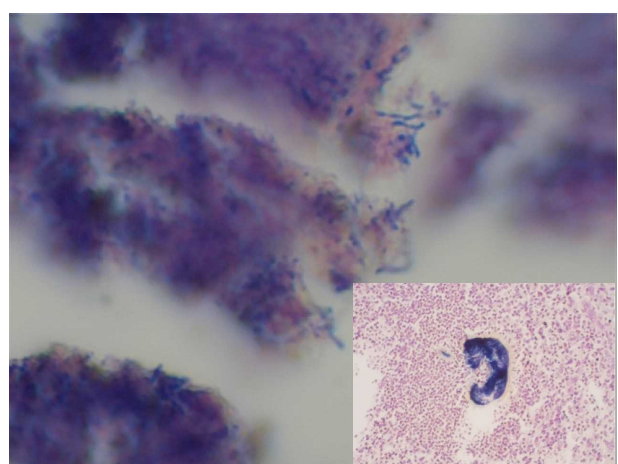


図9：菌塊(グラム染色1000倍、100倍)

【組織診断名】 アステロイド小体の形成を伴う化膿性口内炎

【疾病診断名】 細菌性エプーリス

【行政処分】 部分廃棄(腫瘤のみ)

#### 4. 考察

エプーリスとは、歯肉に生じる炎症が慢性化し、リンパ球や形質細胞などの炎症細胞の浸潤に加えて線維組織の増生などが生じ、病巣が結節状に盛り上がったものをいう。本症例は、肉眼的および組織学的特徴から、細菌性エプーリスと診断し、腫瘍性の病変ではないと判断した。なんらかの原因でできた口腔内の創傷部から細菌感染が起こったと考えられる。

また、アステロイド小体を形成する病変は、放線菌やアクチノバチルスを含む複数の病原体によって引き起こされる。本症例では、グラム染色に陽性を示したことからアクチノバチルスは否定されたが、微生物学的検査を実施していないため原因微生物の同定には至らなかった。

生体検査において頭部に腫れを認めていた場合、腫瘍や炎症性の病変の可能性が考えられるため、解体検査で全身性の病変か否かを迅速に判断する必要がある。今後は症例を蓄積し迅速な診断の一助としていきたい。